審査の結果の要旨

氏名　笠田 舞

近年、知的障がい者も含めた家族全体への支援の必要性が認識されるようになりつつあるが、親に比べてきょうだいへの支援は立ち後れており、きょうだいのニーズに関する研究も少ない。本研究は、障がい者のきょうだいの生涯にわたる体験をライフステージごとに分析し、心理的支援につなげようとした論文である。

本論文は、全4部8章で構成されている。第Ⅰ部「研究の展望」ではまず、知的障がい者の家族ときょうだいに関する先行研究を概観した上で（1章）、本研究の目的、および方法としての半構造化インタビューとTEA（複線経路等至性アプローチ）の概要が解説された（2章）。第Ⅱ部では、研究1として、きょうだいに寄せる親の期待の構造とその変化が、障がい者の親11名の語りをもとに明らかにされた（3章）。

第Ⅲ部は論文全体の中核部分を占めている。まず研究2として、青年期におけるきょうだいが経験するライフコース選択のプロセスを、10代～30代の当事者12名の語りをもとにモデル化している。そこでは、障がいをもつ同胞との距離を探りながら就職・結婚などの決定を行う姿が活写された（4章）。研究3では、40代～50代の当事者14名の語りをもとに、中年期のきょうだいのライフコース選択を検討し、同胞と自分の違いにあらためて目を向けつつ同胞のケア役割を親が担うことの限界に気づくプロセスを明らかにした（5章）。研究4では、ケア役割の移行を経験した40代～60代の当事者5名の語りから、親の病気や他界に直面してからケア提供者ときょうだいという2つの役割の両立に至る過程をモデル化した（6章）。最後の研究5では、研究2から4までのデータ全体を再分析し、青年期から老年期に至るきょうだいの選択・決定プロセスを、TEAで用いられる「人間活動のレベル」「記号レベル」「信念・価値レベル」の変容という観点から検討した。そこでは、家族のライフサイクルのなかできょうだいと原家族との距離が変化しようとする時期にはケア役割の問題が繰り返し葛藤や迷いとして体験に現れる構造が示された（7章）。

第Ⅳ部は総合考察であり、きょうだいが親亡きあとのケア提供者とみなされがちな社会背景のもと、きょうだいへの心理的支援の方向性と、本研究の臨床心理学的な意義がまとめられた。現状ではきょうだいへの体系的な支援は存在せず、心理職がきょうだいと出会う場をシステムとして拡充していくこと、その上でライフコース選択を自由に考える機会を確保し、その家庭の事情や同胞の障がい特性を考慮したきょうだいの役割取得を支援する必要性が強調された。

本研究は、障がい者のきょうだいのライフコース選択を、親亡き後の問題も含めて親ときょうだいの視点から明らかにし、生涯発達的な視点から整理した上でそこに関わる心理職の実践の方向性を示した点で、これまでの障がい者福祉領域における臨床心理学の知見の発展に寄与するところが大きいと評価することができる。以上の理由から、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。